

# 早期療育相談から見えてくる保護者支援

## － 高機能自閉症児の親支援 －

清水 英子

**要旨：**高機能自閉症児を持つ親が、子どもの問題を障害として認識するまでには長い期間を要する。それは自閉症状が軽微である為に専門家が早期に発見したとしても、親が子どもの問題を実感していくのが難しいからである。A市療育センター（以下当センターと称す）に相談、早期療育に繋がりながらも、親は子どもを理解する事への不安や、ショック、諦め、葛藤を繰り返す。子どもへの療育と共に親への支援は重要と考えている。子どものタイプの違いで、相談経過や障害認識への過程が異なる高機能自閉症の2組の事例を通して、親への支援の在り方を探る。

**見出し語：**高機能自閉症、障害認識、保護者支援

### I. はじめに

A市では、発達障害の早期発見・早期療育システムが構築されており、幼児期から療育が開始されている。当センターでは、福祉保健センター健診後の低年齢から早期療育に導入される高機能自閉症ケースが増えている。しかし早期療育に導入はされるが障害の特徴が見え難い為、子どもの問題を抱えながらも障害として受け止める事が難しい。高機能自閉症児を抱えた親は、子どもの問題が「障害」なのか、「個性」なのか、または「子育ての問題」なのか、様々な思いの中で子育てに苦慮していることが多い。子どもの問題が早期発見されたとしても、親が子どもの問題を実感していくのは健常児集団に入った後がほとんどであり、就園後は、健常児との関わりをきっかけに、子どもの問題を障害として再認識する場になってくる。初期相談から就園までの経過のなかでは親への支援がより重要になってくる。高機能自閉症と言われる子どもの状態は様々な症状があり、その症状によって親の障害認識への過程が異なってくる。

ここでは、当センターで行われている就学までの高機能自閉症児への取り組みについて、事例を通して療育機関を利用してきた経過の中での親の発言や記述から、障害認識の過程と変容についての振り返りをし、親への支援について報告をしたい。

### II. 当センターの高機能自閉症児への取り組み

当センターにおける高機能自閉症児への取り組みは、以下の4種類がある。そのうち、下記の1および2は、センター内で行われている取り組みであり、3と4は、幼稚園や保育園に入園した後のフォローとして実施しているものである。

#### 1. 早期療育グループ 週1回（2～3才）

診断告知に至るまでの評価機関であり、子どもの療育を行いながら親と療育者が子どもの状態

像を確認し、障害に対する認識を共有する事を目的とする。同時に親への精神保健が重要となる。

## 2. 母子通園 週2回（3才）

子どもの診断告知後、より具体的な療育目標に基づいた療育を行い、障害への理解や子どもの問題に対する具体的な対応について深めていくことを目的とする。

## 3. 巡回相談 年2回（3～5才）

幼稚園・保育園を訪問して園での子どもの様子を行動観察し、集団生活における問題点を園と確認すると共に、親とも問題について共有し、具体的に園生活での対応を考える。

## 4. 心理相談 月1回（5才）

就園後の子どもの状態把握と、日常生活における問題行動への対応と予防を行う。また、子どもの状態像に合わせた進路支援と、自閉症の特性に合わせた勉強会を開催し、子どもの理解とその対応についての具体的な支援を行う。

# III. 事例1

## 1. 事例の概要

子どもは高機能自閉症の男児。1歳半健診では、特に発達についての指摘はなく通過している。横浜に転居後落ち着きのなさを心配して児童相談所に相談したが、そこでも特に発達については問題を指摘されなかった。その後3歳児健診で、落ち着きのなさを指摘され、3歳3ヶ月で当センターを受診する。早期療育グループ（1週間に1回）への導入となつたが、母親の出産の為長期の休みが入り、グループには4ヶ月程通つて幼稚園に就園した。就園後は巡回相談・心理相談を利用した。家族構成は、父親、母親、本児、妹の4人家族。

## 2. 子どもの状態と保護者心境

### （1）早期療育グループでの様子

心理評価（CA 3歳4ヶ月 MA 3歳3ヶ月 IQ98）

#### 【子どもの状態】

- ・周りの人に対して攻撃的な態度を取る。他児と遊んでいても一方的で嫌がっているのが分からず、手加減が無い。想像的な遊びは長い時間は集中できない。迷路やパズルのような遊びを好む。
- ・「ターミネーター」に凝っていて、いきなりパンチしてたり遊び方が一方的である。
- ・言葉の面では、理解がよく応答にも十分答えることができるが、言葉遣いが荒くちょっとした事でも「バカヤロー」「あっちいってろ」を連発、他人にも言ってしまう。
- ・興奮し易く、「ダメ」と言う禁止語で注意すると、更に興奮して行動がエスカレートする。

### 【親の発言・記述】

- ・ただ動きが多いだけでない気がする。赤ちゃんの頃から気持ちの通じ難さがあった。武器に興味が強いのが心配。17歳の事件などを見て、嫌な予感がした。
- ・早期グループの他の親の通信を読み、自分が「子育てを楽しい」と思ったことが無い事を反省したり、諦めの気持ちになりいけないと思いつつ、冷たい視線を送ってしまう自分に心が揺れる。診療と発達検査で「ADHDと自閉症がある」と言われたが、「自閉症の症状の方が多く出ている」と思った。
- ・夫から「育て方が甘い」と言われた。「体罰が必要だ」とも言うが、「もっといい方法があるのでは?」
- ・友達に「しつけが甘い」と言われショック。自分の接し方が間違っていたのかと不安になった。でも人に何と言われようと、マイペースでいきたいと思う。
- ・「私にはこの子を上手に育てられないかもしれない」と半ば子どもを手放したくなつた。しかし半年間悩みに悩んで、考えに考えて出た結論は「障害が有ると解っても、其れは頭の隅に置いといて子どもを心から愛する」と言う気持ちで子育てをしたい。

### (2) 幼稚園巡回相談・心理相談での様子

心理評価 (CA 3歳11ヶ月 MA 4歳4ヶ月 IQ110)

#### 【子どもの状態・年中】

- ・落ち着きがなく、注意集中が劣り物事に取り組めず、教師が1対1で付かないと動けない。
- ・やってはいけない事を他児がやると「友達を叱ってよ」と怒るが、自分も同じような事をする。遊んでいても、思い通りにならないと友達に手が出る。設定場面は参加するが、嫌いな物はやらない。(体操、遊戯など)

#### 【親の発言・記述】

- ・幼稚園に入れて良かったと思っている。新任の教師だが熱心で子どもの事は話が出来ている。
- ・9月に脳波を取り、投薬で様子を見る事になった。幼稚園では、投薬の有無によって、行動に違いがあり、薬を飲んで来た時は、午前は落ち着いているが、午後になると落ち着きが無くなると言われている。しかし投薬には迷っている(結局、春休みには止める)。

### (3) 幼稚園巡回相談・心理相談での様子

心理評価 (CA 5歳0ヶ月 MA 5歳8ヶ月 IQ113)

#### 【子どもの状態・年長】

- ・他者への意識はあるが希薄さがあり、一方的な関わり方で友達との仲間つくりはうまくいかない。剣やピストルなどの武器に執着。お金、BB弾、ビーズ、ビー玉などカラフルな物に対するこだわりがあり、近所の家にお金を配ったり、お店から綺麗な物を持って帰ってしまったりする事があった。ルールのある遊びは一緒に楽しめるようになるが、声のコントロールが出来ない。

## 【親の発言・記述】

- ・長期の休みは辛い。多動が変わらず母が落着きの無い本児に「ひどいよ」と言うと、「じゃあくすり飲むよ」という。薬の事を本児なりにわかっている。薬は止めたいと思う。子どもの力を確かめたい。
- ・学校が目前に迫ってきて、焦ってしまう。同じ事を繰り返す子どもにイライラして当たってしまう。家では言う事を聞かず、困っている。片付けが出来ないなど本児に怒ってばかりいる。本児から、「ママは僕の事ばかり怒る。僕のこと嫌いなんだ」と言われた。
- ・年中ぐらいまでは「どうして、みんなの出来る事が出来ないのだろう?」「変な事ばかりするのだろう?」と叱ってばかりいたが、今は「出来ないことには少し目を瞑って、出来ない事を色々な方法でできるようにしてあげたい」と思えるようになった。通い始めて3年でやっとここまでです。

## 3. 小考察

1歳半健診では発達の問題は指摘されなかったものの、母親は子育ての難しさを早い時期から感じていた。3歳児健診で落ち着きの無さを指摘され「何かおかしい」と言う疑問を持ちつつも、言葉の遅れは無く理解も良い為、普通の子育ての大変さとしての捉えをしている。

### (1) 早期療育グループの療育

子育ての困難さが発達の問題であるという事についての投げかけをして来た。母親が知識としての受け止めをしようとしている事が伺われるが、子どもの対応に日常追われながら発達障害を考えられる事に悩み気持ちが動搖する。療育も短期間だった為母親の気持ちは整理出来ないまま、「幼稚園に入ったら何とかなるのでは」という期待を持ちながら、動搖や不安を抱えて就園となつた。

### (2) 心理相談

就園後の子どもの変化が期待通りにいかず不安や苛立ちが続く母親に対して、発達障害についての不安や動搖を受け止めながらも、行動の特徴についての説明や障害についての情報提供をしながら、子どもが起こす問題についての理解を促した。そして就学についても、問題が引き続く事など伝える。母親のイライラは年長後半まで続いていくが、幼稚園が終わる頃に、気持ちの整理が徐々に出来るようになった。

### (3) 療育経過を通して

早期療育の時期から障害について触れてきた。子育ての大変さを実感してきたが、子どもの状態の見え難さが、子どもを理解するという過程においては母親にとって大きなストレスとなった。巡回相談及び心理相談でも、本児の問題についての話し合いをして来たが、発達障害の視点での深まりには至っていない。母親は、障害としての捉えに抵抗があったと考えられる。子どもの問題と親の気持の整理が出来ず、不安や動搖、葛藤を繰り返す事となつた。初期の療育期間も十分

では無かった事も要因と考えられる。心理相談では高機能自閉症児をグループで対応してきたが、この事例では親の気持ちを受け止める事に、療育者がもっと丁寧に個別に対応する事が必要ではなかったかと考える。母親への支援としては、精神面でのサポートが大事である。母親の障害に対する不安や抵抗を受け止める事と、母親の訴えである、日々の生活での問題についての具体的な支援の方法を共に探ることが、子どもを理解する為の支援として大事な事で有ったと考えられる。

## IV. 事例 2

### 1. 事例の概要

子どもは自閉症の男児。1歳半健診で言葉の遅れや拘りを指摘され、保健センターでの個別相談を経て当センターを紹介された。3歳1ヶ月で当センターを受診。当センターでは、早期療育グループ、継続療育母子通園で療育に通い、その後就園して幼稚園巡回相談・心理相談を利用した。家族は父親、母親、本児、弟の4人家族。

### 2. 子どもの状態と保護者心境

#### (1) 早期療育グループでの様子

心理評価 (CA 3歳7ヶ月 MA 2歳8ヶ月 IQ74)

##### 【子どもの状態】

- ・言葉の遅れがあり、独り言が多い。人に関心は有るが、関わりは一方的である。
- ・特定の物や、手順への執着があり、入浴の手順や玩具をしまう位置がきまっている。
- ・粗大運動、微細運動にぎこちなさがあり手先をあまり使わない。触覚も過敏で、手や服の汚れを気にする。
- ・ひどい癪・パニックで、気に入らない事や弟が近付いただけでもキーキー泣き喚く。
- ・切り換えの困難さがあり、公園やセンターから帰るとき遊びが止められず泣く。

##### 【親の発言・記述】

- ・言葉が遅い事は、1歳過ぎ頃から気になっていた。遊びが止められず、家でもセンターでも大暴れで大変、特に外に出かけるのは大変。
- ・センターに来る事には抵抗があったが、専門家に見てもらい、話も聞けて来て良かった。
- ・診療と発達検査で「発達が凸凹していて、特徴的。言葉が遅いだけでなく、やり取りの仕方自体上手でない。一過性で無い場合は、自閉症が疑われる」と指摘された。特徴はその通りだと思った。コミュニケーションが下手だとは気が付かずショックだった。障害として残るのかが不安。
- ・母親同士で話をすると皆、悩みを抱えているのが分かる。大変さを明るく話せる関係なので楽になる。
- ・センターに通いだしてから、自分自身の見方が変わってきた。どう接したら通じるのか考え るようになった。夫も協力してくれる。来年も療育に通い、じっくりやっていこうと思う。

## (2) 母子通園での様子

心理評価 (C A 4歳6ヶ月 MA 2歳11ヶ月 I Q65)

### 【子どもの状態】

- ・環境が変わり、4月当初はパニックが多かったりしたが徐々に慣れ、人の話が聞けたり、座つていられたり、人とのやり取りも広がった。パニックも減り、気持ちの切り換えが上手になってきた。しかし友達との関わりでは些細な事で泣く。
- ・「ただいま」と「おかえり」の使い方がわからない。発音も不明瞭で手先の不器用さも変わらず、体の使い方が分からぬ。
- ・苦手意識の芽生えが出てきて、出来ないと諦めることが増える。

### 【親の発言・記述】

- ・出来ないと諦めるようになり、自信を無くしてしまわぬか心配。
- ・以前よりも出来る事は多くなっているが、まだまだ予告や前置きが必要な子だと思う。
- ・すぐ焦ってしまい、ワーッとなるが癪は減った。家では問題ない。幼稚教室でも一応流れに乗れるようになって来た。幼稚園はあまり心配していない。学校も普通級に行けるかな。
- ・センターに通うことでいっぱいだった。弟の事も、将来兄の影響が心配。これからも親同士の話し合いの場が欲しい。

## (3) 幼稚園巡回相談・心理相談での様子

心理評価 (C A 5歳5ヶ月 MA 4歳1ヶ月 I Q75)

### 【子どもの状態・年中】

- ・手先の不器用さがあり、幼稚園では教師や友達が言う事には忠実ではあるが融通がきかない。
- ・友達に対する意識が出てきたが、周囲と比較し自分が出来ないと「恥ずかしい」と言って活動への参加を嫌がったり、友達を噛んでしまう事が有る。
- ・周りの子が笑っていると、自分が笑われたと思ってしまう。強い口調に反応し、叱られないのに叱られたと思ってしまう。

### 【親の発言・記述】

- ・だいぶ落ち着いて來たので「園でもなんとかなるかな」、と思っていたがメチャメチャだった。一人で勝手をしたり、友達がふざけて言った言葉を真に受け、「バカにした」「笑われた」と言って噛んでしまう。製作で間違う事が許せず、鉄を投げる。付き添っているがそういう姿を見たくない。園児からも「○○君は何で変なの?」と質問され辛い。
- ・1年で子どもの弱い面が浮き彫りになった。コミュニケーションが弱い。友達好きなのに、些細な事で怒り、泣いてしまう。見ている親もイライラしたり、可愛そうに思えたり…。
- ・知的レベルで問題ないとは言えないので、手帳の申請をしたい。

## (4) 幼稚園巡回相談・心理相談での様子

心理評価 (C A 6歳7ヶ月 MA 6歳2ヶ月 I Q94)

### 【子どもの状態・年長】

- ・手先の課題で上手く出来ないと怒り道具を投げ、「どうしてこんなのがんばりたくないの！」とキレる。
- ・友達と仲良く遊んでいたと思ったら急に、「こないで！」と叫んだりする。玩具を取られると思うのか
- ・道路が渋滞をしていて、真っ直ぐな道路だと「もういや」となってしまい引き返したりする。

#### 【親の発言・記述】

- ・成長してきた分、やらせれば出来ると思っていたが、限界があると思えるようになった。友達の一言々々に引っかかり、聞き流せず、遊びにも付いて行けない。集団に上手く適応出来ない。幼稚園に入って、伸び悩んでいる面が見えた。
- ・療育センター時代に知り合った仲間は、辛い事でも笑いながら話せる。同じ悩みを持つ同志のつながりは大事にしたい。
- ・就学相談で言葉の理解が弱く、配慮が必要と言われた。怒りやすいところがあり、舌打ち、暴言などを指摘され、改めてそういう部分が問題なのだと再確認した。
- ・幼稚園では友達と遊んで欲しいと思い、家に帰ってからも友達の家に連れて行ったり一生懸命だったが難しかった。子どもにとって難しい要求をしていた事によくここに来て気が付ついた。

### 3. 小考察

1歳半健診で本児の言葉の遅れを指摘されていたが、母親は1歳頃より子どもの特徴や音声言語表出の遅れに対する気付きは有ったものの、発達の問題としての捉えにはなっていなかった。

#### (1) 早期療育グループ

診療や発達の評価から発達に遅れが有る事と、行動に特徴がある事などを伝え自閉症としての対応をしてきた。母親も自閉症としての受け止めを持ち始めている事が伺われる。親として不安や葛藤で辛い時期であろうが、子どもの事を何とかしたいと言う一生懸命な思いが感じ取れる。自閉症の診断に対しても心の準備が伺え、むしろ夫への気遣いをしている。また同じような問題を抱えた親との交流の場を持てたことで精神的には安定し、療育に信頼を寄せ前向きに取り組む事が出来ていた。

#### (2) 母子通園

子どもが徐々に落ち着きを見せ始めた為、必死で頑張ってきた早期グループの頃より母親自身も余裕が出てくる。母親は我が子の特徴や難しさを意識しつつも、成長の手応えから追いつく事への期待を膨らませる様になり、健常児集団への情報に関心が向けられる。しかし一方で不安も拭えず、期待と不安とで揺れる自分の気持ちを何とか吹っ切ろうとする。

幼稚園では成長してきても尚、健常児集団に順応しきれない予想外の我が子の姿を目の当たりにし、期待をしていた子どもの姿とは大きな違いを、親は実感する。この事は子どもの現実の根本的な問題への実感を深めることになった。改めて健常児に追いつく事の難しさを実感する。

### (3) 心理相談

子どもが成長と共に状態も変化して来る為、親の気持ちも動搖する。個別相談で子どもの状態を確認し、高機能自閉症としての子どもの問題についての情報提供をして認識と理解について促した。母親は徐々に子どもの状態を冷静に捉える事が出来るようになり、障害の受け止めについても気持ちの整理をつけながら、就学の選択に向かう事が出来た。幼稚園での経験は、子どもの障害について再認識する機会となり、次への学校選択を考える良いきっかけともなった。

### (4) 療育経過を通して

不安やショックを抱えながらも母親が常に前向きに時期時期の問題を捉え、療育者の言葉に熱心に耳を傾け、子どもの状態を受け止めようとする姿勢が伺われる。早い時期に発達の問題を指摘され、母親もまた子育ての中での、子どものつまずきの多さに発達への不安を感じていた事が、療育への繋がりをスムーズにしたと考えられる。母親の行動を支える周りの人の、特に家族の支援は、子育てに悩む母親の最大の力となり、療育を力として障害と向き合い子育てに取り組む事が出来た。更に同じ立場の親同志の支え合いは、困った時に力を合わせていける就学後に繋がる仲間ともなっている。

## V. まとめ

### 1. 子どもの状態と親の障害認識

事例1は言葉や運動の遅れを持たず、多動やこだわり、社会性の問題は伺われるものの、総じて乱暴、落ち着きが無いなど、親が発達障害と結び付けて捉えていくにくい状態を現している。一方、事例2は発達過程で知的な遅れが見られていたが、成長と共に正常域に達した経過を持ち、自閉症については明らかな特徴が見られていた。療育経過の違いもさることながら、こうした子どもの状態の違いが、親の障害認識を左右する要因になっていると思われる。

### 2. 親子を取り巻く周囲他者の支援体制

子育てに悩む母親へのサポートについても大きな違いが見られた。事例1では、子どもの問題を、母親の子育ての問題として捉えられている。そのため周りから色々な事を言われ、かえって母親が混乱する結果となり問題意識がずれてしまう。父親は母親の相談にも協力的ではなかったことから、母親一人で子育てを頑張っているという状況であった（祖父母は遠方）。事例2では、子どもの問題に理解を示し、夫をはじめ祖父母も母親の考えを、バックアップしてくれる存在で、母親は安定した状態で療育に取り組む事ができた。周りが支え、理解を示してくれる人がいる事は、障害児を抱えた母親には不安や葛藤が軽減され安定した気持ちで子育てに向かう事ができる。母親が安定できるような精神的なサポートは、幼児期においては特に重要な事であると感じる。

### 3. 事例から考える保護者支援のあり方

発達障害という視点から親が子どもの問題を捉え難い事例1の様なケースの支援においては、

グループ療育場面に留まらず、よりケースに即した個別への配慮と、時期々々に応じた細やかな支援が必要であったと考える。また支援を考えるうえでも、親が抱える問題の本質を、療育者が様々な視点から知る事が重要であった。

自分の子どもが発達障害であるか否かという、子どもの将来に不安を投げかけられた親のストレスに対して、我々療育者は敏感な受け止めが必要であろう。ここで報告した高機能自閉症児の問題は、加齢と共に様々な問題が顕在化してくる為、就学後も親は期待を持つつも常に不安を抱えながら子育てをしていく事になる。療育者は、「障害」という告知後の親の複雑な気持ちと、そこから始まる心の葛藤を受け止め、時期々々での親の気持ちを理解し、「親がどうしたいのか」という事を確認しながら、「今出来る支援は何か」について具体的に丁寧に対応を考えていく事が大事な事だと考える。また親への精神面でのサポートとして、「親が一生懸命頑張ってここまで子育てに取り組んで来た」という経過をねぎらい認める事も、信頼関係を築き今後への支援に繋げていく上でも重要な事だと考える。

保護者への対応としては、療育者が母親の話をじっくり聞くことや、一緒に考えていこうとする姿勢で関わることを常に心掛け、複数の関わりのあるスタッフ間と連携を取りながら親との関係を築いていくことが、継続されなければならないと痛感した。

事例を通して保護者の支援を考える時、子どもの「障害」の影に見え隠れする親の本音を受け止められる存在でいる事の大切さを、改めて実感した。

